

日本のメディアが言われたくないこと

【訳者注】世界的に一目を置かれ、本サイトでも敬意を払っている、思想家、調査ジャーナリスト、小説家、映画製作者のアンдре・ヴルチェックに、現在の日本がどう見えているかを知っていただきたい。我々の“名誉白人”（3頁）の称号は、うれしいことか恥ずべきことか？ この論文の評価は読む人によるだろうが、少なくとも“反米サヨク”とか、日本の悪口というような、単純なものではないであろう。これが、日本（沖縄）の出版社から依頼されて、ボツになった論文だという事実も、この論文の重い一部である。

Andre Vltchek

June 27, 2016



“日本はネオ植民地主義派閥の一部である。”

このように書くと、あなたは決して二度と、日本のマスメディアの主催する、いかなる公開討論にも招かれないうらう。

そしてこれこそ、数か月前、私が沖縄のある重要な出版社からの誘いを受けて、書いた内容である。

沖縄県内の米軍基地について、私の作ったドキュメンタリー映画が、南米のTVネットワーク TeleSUR によって、スペイン語と英語で放映されたとき、私のこの問題についての意見を日本の大衆に知らせたいという、ある程度の食指が動いたものらしい。あるとき私は、日本を世界のコンテクストに置きながら、同時に沖縄の不満を扱う、1200語のエッセーを書いてくれと言われた。

私はまさにその通りにした。そして書きながらすでに、このエッセーはここでは決して使われないだろうと予感していた。なぜなら日本の出版社やテレビ局は（かつて私は、いくつかの日本のメディアのために書いたことがある）、徹底して西側の利益に奉仕しているからである。彼らは臆病であり戦う意欲がない。しかし私は、ともかくも沖縄の人々のために、そして、私のエッセーがどのように“ボツ”になるかを、しっかり見届けようとして書いた。

数か月後、返事が届いた。編集者が気懸りだと言う主な“問題”が3つあった。第一に、沖縄の人々は、自分が「北朝鮮と同じように被害者」だと、考えられたくはないだろう。第二に、「あなたは本当に、日本の自動車メーカーがインドネシア政府を墮落させていて、彼らは、この国に公共の交通・輸送網を作らせないようにカネを払い、あらゆる都市が文字通り、車とスクーターであふれるように凶っていると思いませんか？」最後に、私の原稿は受理可能な長さを、数語だけはみ出している、ということだった。

私は日本の文化をよく知っているので、私が何を期待されていたのかが正確に分かった。

私は、まさにその逆を書いたのである。私は編集者を侮辱し、原稿を取り下げ、それを NEO に投稿した。それを今ここに転載することにする――

もし誰か、小林正樹監督の9時間の名作『人間の条件』を見る人があれば、その人は、日本の世界の中での立場について、もはや幻覚をもつことはないだろう。

中国、韓国、それに他のアジア諸国は、占領され、略奪され、人々は虐殺され、拷問され、人体実験され、強姦された。

日本を“弁護して”言える唯一のことは、その西側同盟国とは違って、植民地主義の狂気を経験したのは比較的わずかの期間で、ヨーロッパがこの惑星全体を残酷に扱ってきた、何世紀、何千年という野蛮と恐怖の期間とは、比較にならないことである。

日本はいつもドイツに敬服していた。日本は西洋の医学、芸術、科学技術の影響を受けてきた。そのエリートはまた、ドイツの優越思想と例外主義を深く吹き込まれていた。

ドイツがその最初のホロコースト、つまり南西アフリカの植民地でのホロコーストを行っていたとき、日本は目を凝らして見ていた。現在のナミビアにおいて、ドイツ軍は、ヘレロ

族や他の少数民族の人口の 90%近くを殺し尽くした。ドイツの医者たちは、地方の人々に公然と人体実験を行った。多くは首を切られ、その頭部はフライブルグ大学や、いくつかのベルリンの病院に送られ、アフリカの人々が劣っていることを証明するのに用いられた。この同じ医者たちが後に、メンゲレ博士や他の殺し屋たちを教育し、彼らは第二次大戦中に、ユダヤ人やロマ民族、その他“劣等民族”に実験を行った。

日本は、ますますドイツ人に影響され、アジアに対し自分流の計画を立てた。その後、中国人に対して、医学的な実験を行うようになった。

西洋でも日本そのものでも、ほとんど言われたことはないが、日本のアジアでの帝国主義的殺戮は、西洋の植民地主義や民族差別に、直接、影響を受け、吹き込まれたものであることは言うまでもない。

日本は優れた学生である。彼らは、外国から来る、もっと正確に言えば、西洋から来るあらゆる物を愛する。多くの場合に、彼らとその師匠と区別ができなくなる。あまりにもそれが顕著であるので、南アフリカとその植民地のアパルトヘイトの時代に、日本民族は“名誉白人”の地位に“引き上げ”られた。彼らは、少数の白人だけに許された仕事をさせてもらえる、唯一の非白人であった。彼らは歓迎されて、支配者たち専用の住宅に住んだ。彼らはついに“受け入れられた”のだった。

日本は、そのファシスト同盟国と一緒に戦争を戦った。彼らは人道に対する罪を犯し、敗れた後は直ちに、ドイツ人と同じく、主に白人でヨーロッパ系の勝利者たちに屈した。

ドイツ人とイタリア人に代わって、今度は彼らは、イギリス人、フランス人、オーストラリア人を尊敬し、特に北アメリカ人がその中心だった。

日本のファシスト産業複合体と統治システムは、ほとんど完全に、勝利者権力に保管された。最悪の戦争犯罪人たちが、再び組織を運営することが許された。「東京裁判」は茶番にすぎなかった。

日本は何をするにしても、うまくやり、伝説的な正確さでやってのけた。朝鮮戦争のときの西側との協力は完璧で、感謝した植民地主義者たちはそれに報いた。略奪され屈辱を与えられた、他のほとんどの植民地とは違い、日本は地位を上げられ、豊かになることを許された。

有頂天になったこの国は、その資本主義的生産力を増強し始めた。彼らがそれまでどういう立場だったかは、全く疑いの余地がない。彼らは、最初は後輩パートナーとして、後には同

等のクラブ・メンバーとして、西洋帝国主義に加わった。彼らは常に、あらゆる努力を尽くし、彼らを指図する者たちより、もっと西洋的に、もっと資本主義的になろうとし、イデオロギー的には、更に独断的に、原理主義的になろうとしてきた。

日本はかつて、進歩的インドネシアのアフメド・スカルノ大統領や、最も影響力のあったマレーシア首相マハティール・ビン・モハマドを欲求不満にさせた。彼らはしばしば日本に対し、「アジアに帰る」ように懇請した。

日本はどこにも帰るつもりはなかった。彼らは、自分を“エリート・クラブ”の会員と自認し、その居心地がよかった。ヨーロッパ人から学んだとおりに、彼らは自己の利益を、道徳、連帯、ヒューマニズムより上位に置いた。

政治的な転身によって、その過去と現在に関係する情報のマキアヴェリ的な操作が、西側で行われる情報操作やプロパガンダと、ほとんど同じものになった。

経済的テロリズムが突然、限度をなくした。例をあげるなら、日本の自動車産業は、インドネシアという地上で 4 番目に人口の多い国家に、公共の輸送・交通手段を作らないことを要求することによって、その政府を直接的に墮落させている。その結果として、億単位の人々が、交通渋滞によって麻痺し、汚染関係の病気によって死につつある。ジャワ島のインフラストラクチャーはほとんど全面的に崩壊した。しかし、その人々が日本の車やスクーターを買うように強要されるかぎり、日本は眉一つ動かすことはない。

日本はまた、アジアのあらゆる所からやってくる、若く野心的な学生のための“教化の場所”になっている。無数の日本の大学が、“奨学金”を提供し、貧しく、潜在的に反逆的な国家からの才能ある男女を、効果的に洗脳し、“中立化”している。彼らのほとんどは、“コミュニケーション”、“教育”、“開発”すなわち、基本的に、何も言わないこと、何についても反逆しないことを教えられる。彼らは、「帝国」や野蛮な資本主義に対して立ち上がらないこと、もっと正確に言えば、日本のように振舞う振舞い方を、辛抱強く教え込まれる。「エリートに加わろう、良い生活をエンジョイしよう。そして哲学とモラルを、そこから締め出そう！」

日本は、地上で最も恐ろしい軍事基地のいくつかを、沖縄に置かせている。

私がそこで行った、南米の TV ネットワーク TeleSUR のための映画作成のとき、最初に見たのは、そこで活動している日本帝国主義だった——偉大な沖縄文化は抑圧され、その代わりに、柔順なら社会保障が与えられ、そして基地に関する倫理的・国際主義的な発言は、す

べて黙らされていた。

しかし沖縄島民は知っており、多くの人々が、今恐ろしいことが起こっていると感じているのだが、何も変えられないでいる。

ここから第三次大戦が始まるかもしれないのである！ 西側が中国（実は、歴史的には沖縄の同盟国）と北朝鮮（現在、沖縄と同じ犠牲者）を挑発する行動が、ここから始まるかもしれないのである。

何年前か、私はある中国の外交官にこう言われた——「もし西側が我々を攻撃するなら、我々は、ワシントンやロンドンに報復することは、おそくないだろう。我々は日本に報復する。なぜなら、日本の領土から攻撃がやってくるはずだからだ。」おそらくは、しかし皮肉にも、この報復は、現実には基地を置かせている沖縄の島々に対して行われるだろう。

多くの沖縄人はその危険を理解している。そしてもちろん、彼らは全面的に戦争に反対している。しかし日本政府は、基地を閉鎖せよという彼らの要求を、全く無視している。現在の政府は、ますます好戦的、反中国、反北朝鮮、そして恥ずかしくなるほど、親西側になりつつある。

首相は日本の愛国者を気取っている。しかし安倍晋三氏は、実は協力者であって愛国者ではない。そしてそれは、彼が“右翼”だからではない。（三島由紀夫も、その遺したものに異論があるにせよ右翼だった。しかし疑いの余地なく、彼は真の日本の愛国者だった。）安倍は日本の利益のために奉仕していない。西側の利益に奉仕している。70年ほど前に日本を敗北させ、徹底的に爆撃し、そして占領した「帝国」、アジア全体にわたって、何千万という人命を奪った「帝国」の利益に奉仕している。

最近の、“自衛隊”の日本部隊を、海外に派遣することを許可する法改正は、何も新しいことではない。日本はすでに、いくつかの戦争に金銭支援をしており、「帝国」のための軍事技術を考案し、その敵を挑発している。それは何年も、何十年も前から続いている。

第二次大戦のときと同じように、日本は今再び、ファシスト同盟の、大いに信頼され尊敬される一員になっている。彼らは完全に武装をし、自国の平和憲法を変えようとさえしている。役者は入れ替わったが、本質は変わっていない。あたかも日本は、西側の帝国主義的盟約の仲間にならんとする、強い自発的な性癖をもっているかのようである。

もちろん、すべては自衛の名において、“自由”、“民主主義”、“平和”のような高邁なスロ

ーガンをまき散らして、行われている。行動の背後にある衝動がより不気味である——アジアの同胞諸国に対する人種差別、(ヨーロッパや北アメリカから学び、取り入れた) 攻撃的な‘例外主義’、それに西側に屈服する奴隷根性。これが我々の住んでいる今の世界である。偉大なインドの思想家 **Arundhati Roy** の言葉を砕いて言えば——「今、黒が白と呼ばれ、戦争が平和と呼ばれている。」あるいは少なくとも、西側世界と日本においてはそうだ！